

スポーツ総合演習がスポーツ学科の学生に与える影響について

The Impact of General Sports Exercises on Students in a Department of Sport Science

中井玲奈 (人間科学部スポーツ学科卒業生)

Rena NAKAI (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Graduate)

西村貴之 (人間科学部スポーツ学科教授)

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Professor)

島田一志 (人間科学部スポーツ学科教授)

Kazushi SHIMADA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Professor)

〈要旨〉

本研究では、「スポーツ学科の必修科目であるスポーツ総合演習の授業効果および学生への影響」、「直近4年間の異なる学外演習プログラムの内容が、それぞれにもたらした効果および学生への影響の差異」を明らかにすることを目的とした。研究の結果、スポーツ総合演習は大学1年次学生の新たなコミュニティの形成という効果があった。スポーツ総合演習をきっかけに学生は人間関係を築き、多くの能力を身につけたと感じ、その後の学校生活に繋がっていることが明らかとなった。また、学外演習プログラムの内容の違いについて、「宿泊」、「ドラゴンボート」がコミュニケーション機会の創出に貢献しており、人間関係やコミュニティが形成されていることが明らかになった。一方、スポーツ総合演習で得たものでも、4年間の大学生活では継続できていないものもあるという課題点があり、スポーツ総合演習の授業効果をその後に繋げていくことの必要性が示唆された。

〈キーワード〉

スポーツ総合演習, 初年次教育, 学外演習

1 背景

「スポーツ総合演習」これは、金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科の学生が、1年前期に履修する必修科目である。この授業では、グループ活動、学外演習などが実施されており、他の授業と比べ、学生間の交流の機会が多くなっている。大学入学直後という新たなコミュニティや環境による不安を抱える時期におけるスポーツ総合演習の授業は、履修学生にとって大きな影響を与えていると推察される。また、初年次教育の観点からもスポーツ総合演習に対しては高い教育的効果が求められる。初年次教育とは、高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラムであり、高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたものと定義されている¹⁾。また、大学初年次教育研究会(2020)によると、「大学のカリキュラムは、知

識・経験などの度合いを、年次に応じて高めていく段階のように造られている」としている²⁾。初年次教育は、大学生活のスタートとして大きな役割を担っており、スポーツ総合演習の授業も初年次教育としての効果が期待されている。例えば、法政大学のスポーツ総合演習の授業では、大学新生に対し授業で構成的グループエンカウンター(Structured Group Encounter)を取り入れることで、【仲の深まり】【コミュニケーション能力の向上】【自己他者理解の促進】【意見・感情の共有】【スポーツ活動を通じた気づき】【SGE経験によるスポーツ活動の活性化】【自身の課題の認識】の7つが成果として挙げられている³⁾。このように、授業の成果を評価、検証することは、その後の授業改善や教育効果の向上に対して有意義な知見となる。しかしながら、金沢星稜大学のスポーツ総合演習においては、授業意図や効果について、改めての評価、検証はまだ実施されていない。そこで、金沢星稜大学でのスポーツ総合演習の授業効果を高める要因を検証したいと考えた。

また、筆者は2019年度に受講学生としてスポーツ総合演習に参加し、その後3年間サポート学生としてスポーツ総合演習の授業に携わってきた。サポート学生を務めた2020～2022年度の期間は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて年度ごとに学内外でのプログラムの変更が相次いだことから、2019～2022年度の4年間のスポーツ総合演習を比較することで、授業内容による違いが、授業効果や学生に与える影響の差異を検討することができるのではないかと考えた。また、スポーツ総合演習がスポーツ学科の学生に与える影響についてその実態を把握することで、今後の授業効果の向上方策を検討するための知見が得られると考えた。

2 研究の目的・方法

2-1 研究の目的

本研究の目的は、①スポーツ学科の必修科目であるスポーツ総合演習の授業効果および学生への影響について明らかにすること。②直近4年間の異なる学外演習プログラムの内容が、それぞれにもたらした効果および学生への影響の差異を明らかにすること。以上の2点である。

2-2 研究の方法

前述の目的を達成するため、本研究では、履修学生へのアンケート調査、授業担当教員への聞き取り調査を実施し、各種データの収集を行った。そして、得られたデータの分析から考察を行った。

3 金沢星稜大学のスポーツ総合演習（聞き取り調査の結果を踏まえて）

3-1 スポーツ総合演習の「科目の具体目標」

授業シラバスには、スポーツ総合演習の「科目の具体目標」として以下の内容が記載されている⁴⁾。なお、開講当初から内容の変更はされていない。

- 1) 効率的かつ安全にスポーツを学ぶためのスポーツ学科の基本的な授業の様式を体験し、身につける。
- 2) 十全にスポーツ学科で学習するための心身のコンディションの維持について実践を通して理解する。
- 3) スポーツ学科の学生として適切な言葉遣いと行動、生活および学習の習慣を身につける。
- 4) 基礎ゼミおよびクラブの範疇を超えた、スポーツ学科での生活および学習に必要なコミュニケーションを構築する。
- 5) 困難を克服して課題を達成する力を身につける。

3-2 スポーツ総合演習のこれまでの過程

授業担当教員への聞き取り調査の結果、スポーツ総合演習は、2011年度スポーツ学科5期生が1年生の際に開講され、2022年度で第12回を迎えた。開講経緯としては、スポ

ーツ学科創立から4年、学生が一回りした際に、「学生に受講のための規律を教えなければならない。」という考えを持つようになったことがきっかけとしている。その上で、スポーツ総合演習という名称で授業を開講することが決定した。また、入学して間もない1年前期の間に、授業を通して学務システムやメール、パワーポイント、ワードを使用することを経験させておくことも必要だと考えたという。それに加え、学外に出て、困難克服型の共同作業をしたいという思いがあったと説明している。ここでの困難克服というのは、根性で終わらせるようなものではなく、考え、協力し、集団の工夫が見られるものだと考えている。

3-3 直近4年間の学外演習の日程とプログラム内容

開講当初から2019年度実施までの学外演習については、ドラゴンボートや歩行、持久走などのプログラム内容で、1泊2日の宿泊を伴った形で行われてきた。けれども、新型コロナウイルス感染症の影響から、2020年度より、授業内容や学外演習の開催時期が大きく変更された。なお、学外演習では、ドラゴンボートの定員や安全性を考慮した上で、履修学生の人数に応じて複数の日程（前段・後段）に分かれて実施している。そのため、気象状況などの影響から学年間で実施内容が異なる場合もあった。

表1 直近4年間の学外演習について

年度	2019年	2020年	2021年	2022年
日程	1泊2日 5月下旬から6月上旬	1泊2日 (2日目活動なし) 8月中旬	1日日帰り (宿泊なし) 9月中旬	1泊2日 5月下旬
プログラム	・ドラゴンボート ・10km歩行 ・10km持久走	・海上浮遊 ・10km歩行	・30km歩行	・ドラゴンボート 【前段】 ・10km歩行 【後段】 ・30km歩行 ・10km持久走

直近4年間（2019～2022年度）の中で、特に2021年度は、日帰りでの学外演習となり、持久走やドラゴンボートを行うことが出来ず、2019年度と内容が大きく異なっていることが分かる。

4 アンケート調査（調査対象・実施期間）

調査対象は、2022年度金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科の1～4年生とした。1年生は前段・後段で、学外演習実施内容が異なっているため、同学年ではあるが2つ（前段・後段）に分けて集計を行った。同様に4年生は追加演習が別プログラム内容で開催されたため、4年生と4

表2 学年ごとのアンケート対象者数、回答数、回収率

	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生	4年生 追加演習
対象者	80人		74人	84人	74人	
回収数	36枚 (うち 無効3)	37枚 (うち 無効1)	72枚 (うち 無効2)	71枚	66枚	8枚
回収率	91%		97%	85%	100%	

年追加演習も分けて集計を行った。実施期間は、2022年10月7日から11月7日とした。学年ごとのアンケート対象者数、回収数、回収率は以下の通りである。

アンケート調査実施時点において、スポーツ総合演習の単位未認定学生の回答、および回答に明らかな不備があったものは、無効とした。なお、4年生追加演習においては、回収数が少ないことと通常の学外演習とは大幅にプログラムの内容を変更しての実施であったため、以後の分析からは除外した。

5 調査結果・考察

5-1 スポーツ総合演習で身についた力

「スポーツ総合演習で身についた力」について9つの項目を挙げ、複数回答可で回答してもらった(表3)。その結果、「1年生前段」は、コミュニケーション能力、状況判断力がともに72.7% (24人)、「1年生後段」は、コミュニケーション能力が63.9% (23人)、「2年生」は、忍耐力が55.7% (39人)、「3年生」は、忍耐力が54.9% (39人)、「4年生」は、忍耐力が62.1% (41人)と、それぞれ最も回答者が多かった。全体で見ても、コミュニケーション能力、忍耐力、状況判断力が上位を占めていた。

表3 スポーツ総合演習で身についた力

力	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生
課題解決力	24.2%	38.9%	14.3%	28.2%	30.3%
コミュニケーション能力	72.2%	63.9%	40.0%	53.5%	42.4%
情報発信力	12.1%	16.7%	8.6%	1.4%	6.1%
リーダーシップ能力	6.1%	11.1%	5.7%	1.4%	6.1%
状況判断力	72.7%	41.7%	32.9%	35.2%	31.8%
傾聴力	36.4%	33.3%	18.6%	29.6%	19.7%
まとめる力	3.0%	5.6%	7.1%	5.6%	9.1%
責任感	33.3%	44.4%	31.4%	21.1%	28.8%
忍耐力	39.4%	58.3%	55.7%	54.9%	62.1%

ここ(表3)での回答からは、学年ごとに明らかな差異はあまり感じられなかった。その理由として、学年ごとに学外演習の実施内容は異なっているが、授業の流れとして

事前に学内での授業を行い、整列・点呼の練習や資料作りなどを経験し、その後学外演習に参加するという全体の構成やルールにはあまり違いが見られなかったことが考えられる。このことから、授業全体の効果として、スポーツ総合演習を通じて多様な能力を身につけることができていたことが分かった。

5-2 コミュニケーション

スポーツ総合演習で「コミュニケーションをとるきっかけ」となった要因を回答してもらった(表4)。学年ごとに実施内容が異なるため、それぞれが行った実施内容の中からの選択とした。実施していないものについては、(-)と表記した。その結果、「1年生前段」は、宿舎が24.2% (8人)、学外演習前の授業が18.2% (6人)、「1年生後段」は、宿舎が33.3% (10人)、ドラゴンボート、学外演習後の発表がともに20.0% (6人)、「2年生」は、歩行が39.3% (24人)、バディが23.0% (14人)、「3年生」は、宿舎が38.7% (24人)、バディが21.0% (13人)、「4年生」は、ドラゴンボートが33.9% (21人)、宿舎が19.4% (12人)とそれぞれ上位2つを占める結果となった。

表4 コミュニケーションをとるきっかけとなった要因

項目	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生
バディ	9.1%	6.7%	23.0%	21.0%	4.8%
ドラゴンボート	12.1%	20.0%	-	-	33.9%
宿舎	24.2%	33.3%	-	38.7%	19.4%
歩行	9.1%	0.0%	39.3%	4.8%	1.6%
持久走	0.0%	0.0%	-	0.0%	0.0%
スマホ禁止	15.2%	10.0%	13.1%	19.4%	6.5%
資料作り	3.0%	3.3%	1.6%	1.6%	12.9%
海上浮遊	-	-	-	4.8%	-
サポート学生	0.0%	0.0%	6.6%	1.6%	3.2%
学外演習前の授業	18.2%	6.7%	14.8%	1.6%	8.1%
学外演習後の発表	9.1%	20.0%	1.6%	6.5%	9.7%

ここ(表4)では、宿泊を行った「1年生、3年生、4年生」は、宿泊での時間が、コミュニケーションをとるきっかけとして非常に有効な時間となっていたことが分かる。一方で、「2年生」は、宿泊の他に、他学年で上位を占めているドラゴンボートも行っていないため、コミュニケーションをとるきっかけが他学年に比べ、極めて少なかったのではないかと考える。このことから、コミュニケーションに着目して考えた際に、「宿泊」、「ドラゴンボート」というのは、大きな効果をもたらしていると考えられる。さらに、コミュニティが形成されるきっかけにも繋がっていると考えられる。

5-3 影響度

「スポーツ総合演習がその後の学校生活に与える影響度」を0から10の尺度で回答してもらった(表5)。数字が大きいくほど、影響が大きかったということになる。ここでは、[1]影響度7以上、[2]影響度3以下の2点に着目した。その結果、[1]影響度7以上の回答では、「1年生後段」が72.1%(26人)と最も割合が大きく、「2年生」が37.2%(26人)と最も割合が小さくなっているという結果であった。一方、[2]影響度3以下の回答では、「1年生後段」が2.8%(1人)と最も割合が小さく、「2年生」が25.7%(18人)と最も割合が大きくなっているという結果であった。この2点から見ると、「1年生後段」への影響度が高くなっている一方、「2年生」への影響度は低くなっていることが分かる。

表5 スポーツ総合演習の影響度

学年 影響度	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生
影響度0	3.0%	0.0%	7.1%	5.6%	3.0%
影響度1	0.0%	0.0%	4.3%	2.8%	6.1%
影響度2	3.0%	0.0%	2.9%	8.5%	6.1%
影響度3	0.0%	2.8%	11.4%	4.2%	6.1%
影響度4	9.1%	5.6%	5.7%	9.9%	7.6%
影響度5	12.1%	8.3%	17.1%	9.9%	10.6%
影響度6	15.2%	11.1%	14.3%	19.7%	22.7%
影響度7	21.2%	33.3%	10.0%	19.7%	16.7%
影響度8	21.2%	19.4%	10.0%	12.7%	13.6%
影響度9	6.1%	8.3%	4.3%	4.2%	4.5%
影響度10	9.1%	11.1%	12.9%	2.8%	3.0%

学年間での比較の結果、1年生(前段・後段)で影響力があるという回答が多いことが分かった。その理由として、スポーツ総合演習を終えて間もないこと、ドラゴンボートや宿泊が行われたことが影響を与えているのではないかと考える。

さらに、自由記述で回答してもらった影響度の理由を、計量テキスト分析ツールであるKH Coder⁵⁾を使用し、出現する単語の共起関係から、回答にどのような傾向があるかを分析した。

全学年を対象とした、影響度「7から10」のグループの意見を共起ネットワークによる分析(図1)を行ったところ、「できた、なれた、変わった、達成感」といったポジティブな語群に加え、「コミュニケーション、礼儀、言葉遣い」といった語群が非常に多く抽出されており、スポーツ総合演習を通しての学びや成長が強く感じられた。ここでは、学外演習の実施内容による学年間での気づきや影響には差異が生じているものの、どの学年にも自身の変化や成長、今後の学びとして影響を与えていたことが明らかになった。

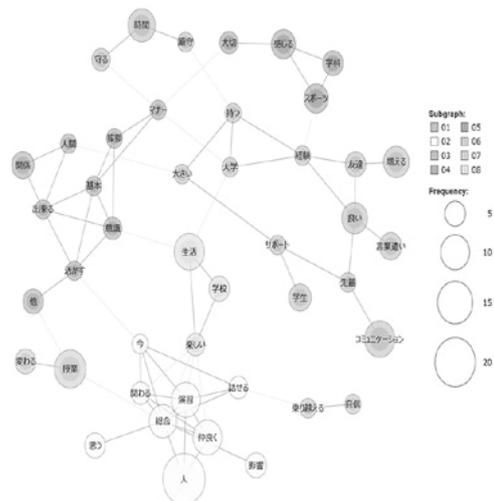


図1 共起ネットワーク「影響度7から10」

5-4 ルール

「スマホ、頭髪、服装等の厳しいルールは、授業の目的を達成するために有効であったか」について、5つの尺度を用いて回答してもらった(表6)。頭髪、服装等の厳しいルールというのは、安全面等を考慮してピアスなどの服飾品は禁止、また、学習者としてのマナーの観点から茶髪、極端な長髪およびヒゲなどは禁止とする。スマホのルールというのは、学外演習中スマホの使用を禁止とし、事前にスマホを回収するというものである。「1:そう思わない」から「5:そう思う」までの5つの尺度を用いて回答を得た。

ここ(表6)では、どの学年も1から5すべての尺度に回答が散らばっているという結果であった。「1年生前段」、「3年生」は4、その他の学年では3に最も回答が集まっていることが分かる。また、全体で見ると、3と回答したのは27.9%(77人)、4と回答したのは26.4%(73人)という結果であった。その他の3つの尺度はおおよそ同じ割合を示しており、この設問では、意見が散らばっていることが分かった。その理由として、スマホ、頭髪、服装等のルールが授業の目的を達成する上で有効だと考える意見もあるが、全ての目的に必ずしも影響を与えているわけではないという意見やルールが厳しすぎるという意見があったからである。大学での他の授業では、あまりルールが設定されていない分、ルールが細かく設定されていることに対して、学生が緊張感や圧迫感を感じてしまうのかもしれない。また、ルールがあることによって、自由が失われることにプレッシャーを感じ苦しさや不満に繋がっているのではないかと感じた。

一方で、ルールがあることによる効果もあったと考えてられる。それは、コミュニケーションに関する良い影響である。2022年度金沢星稜大学「スポーツ科学概論(第10回)」での「スポーツ総合演習」に参加した1年生を対象

表6 ルールに関して

学年 尺度	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生
1. そう思わない	15.2%	2.8%	12.9%	9.9%	16.7%
2. どちらかというと思わない	15.2%	13.9%	15.7%	15.5%	19.7%
3. どちらとも言えない	12.1%	36.1%	34.3%	25.4%	27.3%
4. どちらかというと思う	36.4%	22.2%	17.1%	33.8%	25.8%
5. そう思う	21.2%	25.0%	20.0%	15.5%	10.6%

とした「スポーツ総合演習時にスマホを持たない状況について」の調査結果⁶⁾によると、スマホを使用禁止にすることで、コミュニケーションをとるきっかけとなり、授業効果を高めていることが分かった(図2)。

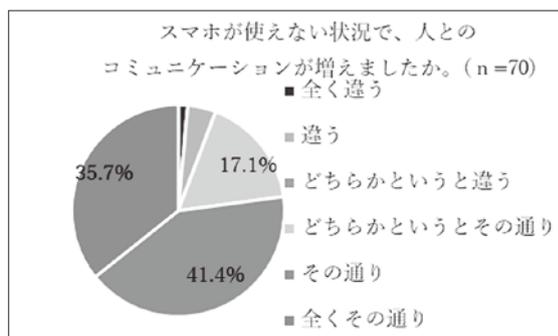


図2 スマホ禁止による人とのコミュニケーションの変化
新谷(2022)⁶⁾

さらに、スマホが使えないことによる変化として、回答したスポーツ学科の1年生の54.3%(38人)が普段と違う活動をするようになったと回答している(図3)。

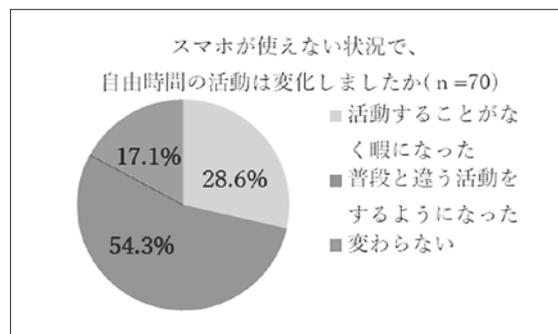


図3 スマホ禁止による活動の変化
新谷(2022)⁶⁾

これらのことから、スマホ禁止等のルールは、コミュニケーションに着目して考えた際に、授業の目的を達成する上で、大きな意味を果たしているのではないかと考える。

5-5 教員の雰囲気

「教員の雰囲気は、授業の目的を達成するために有効であったか」について、「1: そう思わない」から「5: そう思う」までの5つの尺度を用いて回答を得た(表7)。

表7 教員の雰囲気に関して

学年 尺度	1年生 前段	1年生 後段	2年生	3年生	4年生
1. そう思わない	0.0%	0.0%	15.7%	1.4%	7.6%
2. どちらかというと思わない	0.0%	5.6%	11.4%	4.2%	6.1%
3. どちらとも言えない	9.1%	27.8%	18.6%	21.1%	27.3%
4. どちらかというと思う	51.5%	33.3%	30.0%	42.3%	42.4%
5. そう思う	39.4%	33.3%	24.3%	31.0%	16.7%

その結果、「1年生前段」では、90.9%(30人)が4または5と回答している。「1年生後段」は、3、4、5に回答が集中し、全体の94.4%(34人)を占めている。「2年生」は、1から5すべての尺度に回答が散らばっており、他の学年との差異が生じていることが分かる。これは、「2年生」が他の学年に比べ、教員の目が届かない自由時間が少なかったことが影響しているのではないかと考えた。「3年生」は、1年生後段同様に3、4、5に回答が集まり、全体の94.4%(67人)を占めている。「4年生」は、59.1%(39人)が4または5と回答しているという結果であった。また、全体で見ると、4と回答した人は39.1%(108人)と最も大きな割合を占めているという結果であった。一方で、1または2と回答した人は、全体の12.4%(34人)と少なく、教員の雰囲気について有効だったと感じている傾向が高いということが分かる。

また、益子・斎藤(2012)によると、「教師の表情は児童に影響を与え、教師の存在感を形成する一要因として、教師の表情が果たす役割は大きいことが示唆された。」としている⁷⁾。このことから、教師の表情による学生の受け止め方には違いが生まれてくるのではないかと考えた。これに対して、三島・宇野(2004)によると、「現実の教育現場においては、教師が罰を予期させながら指導せねばならない状況も存在するものと思われるが、その際、『叱り方や外見からくる怖さ』によった方が、児童は反抗的にならず指導を素直に受け取ることができるのかもしれない。」としている⁸⁾。このことから、「怖い」がもたらす学生への影響は、ネガティブな要因だけではなく、授業の雰囲気作りとしての効果があるのではないかと感じた。さらに、「そう思わない」と回答した学生は、スポーツ総合演習の影響度も低くなっている傾向があることから、教員の雰囲気

気による学生の授業の捉え方は、プラスの影響とマイナスの影響が混在しているといえるだろう。

5-6 受講者（回答者）の心境

「授業開始前」、「学外演習前」、「学外演習後」の3つの段階において、回答者の心境に1番近いものを9つの項目より1つ選択して、回答してもらった（表8）。

表8 受講者（回答者）の心境

	授業開始前	学外演習前	学外演習後
皆と仲良くなった	5.6%	4.9%	7.5%
楽しかった	2.6%	2.6%	16.2%
やり遂げた	1.9%	9.3%	35.0%
成長できた	0.0%	2.2%	10.5%
辛かった	3.7%	4.1%	4.9%
不安	23.9%	18.3%	1.1%
怖い	9.0%	5.2%	0.4%
面倒くさい	17.5%	15.3%	4.5%
単位を落としたいくない	35.8%	38.1%	19.9%

ここでは、学年ごとの結果を比較するのではなく、全学年における段階ごとの結果を比較することで、心境の変化を検討した。その結果、授業開始前は、「単位を落としたいくない」と回答した人が35.8%（96人）、「不安」と回答した人が23.9%（64人）、学外演習前は、「単位を落としたいくない」と回答した人が38.1%（102人）、「不安」と回答した人が18.3%（49人）、学外演習後は、「やり遂げた」と回答した人が35.0%（93人）、「単位を落としたいくない」と回答した人が19.9%（53人）という結果であった。

授業が進行していく過程で、様々な要因から受講者にとって心境の変化があり、ネガティブな捉え方からポジティブな捉え方に変化している傾向があるのではないかと考える。一方で、3つの段階で共通していることは、「単位を落としたいくない」と回答した割合が大きいということである。このことから、授業の目的が逸れ、受講者の意識や目指すものが授業の単位を取得することになってしまっている可能性があるのではないかと考えた。

5-7 スポーツ総合演習の必要性や意義

「授業開始前」、「学外演習前」、「学外演習後」の3つの段階において、「スポーツ総合演習を受講することの必要性や意義をどの程度感じていたか」について、5つの尺度を用いて回答してもらった（表9）。

その結果、「授業開始前」は、4または5と回答した人が32.6%（92人）、「学外演習前」は、4または5と回答した人が51.8%（147人）、「学外演習後」は、4または5と回答し

表9 スポーツ総合演習の必要性や意義（全体）

	授業開始前	学外演習前	学外演習後
1.意義がない	6.7%	3.9%	3.2%
2.どちらかという意義がない	20.6%	16.2%	6.0%
3.どちらとも言えない	40.1%	28.2%	15.5%
4.どちらかという意義がある	20.9%	36.3%	40.8%
5.意義がある	11.7%	15.5%	34.5%

た人が75.3%（214人）という結果であった。このことから、授業が進行していく過程で、授業の必要性や意義を感じる人の割合が徐々に増加していることが分かる。

「授業開始前」において、4または5と回答した割合が最も大きいのは、「2年生」であった。しかしながら、「2年生」は「学外演習後」において1または2と回答した割合が最も大きくなった。3つの段階において、スポーツ総合演習の必要性や意義を感じている割合は増加傾向にあるものの、他学年に比べると変化が少なかった。その理由として、「2年生」は新型コロナウイルス感染症の影響から高校時になかなか学外での活動ができなかったことにより、スポーツ総合演習への期待や必要性をより強く感じており、授業開始時での必要性が他学年より高くなっているのではないかと考えた。また、新型コロナウイルス感染症の影響により学外演習プログラムが変更され、思い通りに活動することが出来なかったことから、学外演習前後に必要性や意義を感じる割合が他学年より低くなってしまったのではないかと考えた。学科全体としては多くの人がスポーツ総合演習の必要性や意義を感じ、授業の効果が示されているものの、授業内容による差異の発生可能性も示唆された。

5-8 授業の目的定着

授業シラバスに記載されている「科目の具体目標」をどのくらい達成できたのか？（授業終了時）について5つの尺度を用いて、それぞれ回答してもらった。また、「総合演習で学んだことを、現在どのくらい活かしているのか？」についても、5つの尺度を用いて回答してもらった。その中で、この2つの質問で共通している内容である、生活習慣に着目し、回答の変化を比較する。なお、ここでは、授業終了時と現在を比較するため、総合演習実施から2年以上が経過した4年生、3年生のみを対象とした。使用した尺度はそれぞれ以下の通りである。

【尺度】	
・「どれくらい達成できたか？」(達成度)	
1：全くできなかった	2：あまりできなかった
3：どちらとも言えない	4：まあまあできた
5：かなりできた	
・「現在、どれくらい活かしているのか？」(活用度)	
1：できていない	2：どちらかというとできていない
3：どちらとも言えない	
4：どちらかというとできている	5：できている

その結果、3年生が回答した【生活習慣】に関しては、総合演習終了時の達成度は、78.9% (59人) が4または5と回答している。また、現在の活用度(生活習慣)は、4または5と回答した人が全体の66.2% (47人) を占めており、4または5と回答した割合が増加していることが分かる。

表10 生活習慣の比較 (3年生)

	達成度 (生活習慣)	活用度 (生活習慣)
1	0.0%	1.4%
2	1.4%	8.5%
3	19.7%	23.9%
4	42.3%	39.4%
5	36.6%	26.8%

ここ(表10)では、達成度と活用度(生活習慣)の相関係数は、0.4であり、正の相関が見られた。

4年生が回答した【生活習慣】に関しては、総合演習終了時の達成度は、69.7% (53人) が4または5と回答している。また、現在の活用度(生活習慣)は、4または5と回答した人が全体の31.8% (21人) を占めており、4または5と回答した割合が明らかに減少していることが分かる。

表11 生活習慣の比較 (4年生)

	達成度 (生活習慣)	活用度 (生活習慣)
1	1.5%	6.1%
2	3.0%	25.8%
3	25.8%	36.4%
4	40.9%	22.7%
5	28.8%	9.1%

ここ(表11)では、達成度と活用度の相関が見られず、授業終了時から3年以上が経ち、効果が薄れてしまっているように感じられた。これには、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、履修時とその後では学校生活が大きく変わってしまったことに関係があるのではないかと考える。また、4年生は、宿泊を伴う学外活動として2年次に行われる野外スポーツ演習(マリンスポーツ、スノースポーツ)や3年次研修が予定通りに行うことが出来なかったこ

とも影響しているのではないかと考えられる。

4 本研究のまとめ

本研究では、スポーツ総合演習の受講者であるスポーツ学科の学生へのアンケート調査およびその分析、授業担当教員への聞き取り調査を実施した。それらの結果から、①スポーツ学科の必修科目であるスポーツ総合演習の授業効果及び学生への影響について明らかにすること。②直近4年間の異なる学外演習プログラムの内容の違いから、それぞれがもたらす効果及び学生への影響の差異を明らかにすること。以上2点を目的に研究を実施した。

研究の結果、スポーツ総合演習は、初年次教育の効果として、大学1年次の新たなコミュニティの形成という効果をもたらしており、スポーツ総合演習をきっかけに受講学生は人間関係を築き、多くの能力を身につけたと感じ、その後の学校生活に繋がっていることが明らかとなった。また、スポーツ総合演習がスポーツ学科の学生に与える影響は非常に大きく、宿泊やドラゴンボートなどからコミュニケーションをとるきっかけが生まれ、グループでの協力作業などを体験することで学びや気づきから成長へ繋がったりと、スポーツ総合演習の影響として「できた、変わった」というように自分自身の変化を感じることができていることが受講学生にとって大きな影響を与えていた。

学年ごとの比較では、学外演習プログラムの内容の違いによる変化に着目して見ると、「宿泊」、「ドラゴンボート」がもたらす効果として、コミュニケーションをとる機会の創出に貢献し、人間関係やコミュニティが形成されることで、その後の学校生活に良い影響を与えていることが明らかになった。このことから、今後の授業でもこのような効果を期待するために、「宿泊」、「ドラゴンボート」は継続して実施する必要があるのではないかと感じた。また、学外演習のプログラム内容は異なっても、授業全体の構成(ルールや雰囲気、授業の行程など)が統一されているため、新型コロナウイルス感染症による変更にも対応し、どの学年にも共通した授業目的を提示することができ、さらに学年間でほとんど差異なく授業の目的を達成できていたことが明らかとなった。

一方で、初年次教育の効果を継続させることの困難さも明らかとなった。このことから、初年次教育で得たものが、4年間の大学生活の中で継続できていないものもあるということが調査を行った中で明らかとなった課題点であり、初年次教育で終わらせるのではなく、その後に繋げていくことが必要であると感じた。

5 本研究の課題

本研究では、授業効果や学生への影響を明らかにするこ

とができた。一方で、アンケート調査では、1年次に参加したスポーツ総合演習から学年によっては最大3年以上が経過しているため、記憶の鮮明さという点において、回答には限界があったのではないかと考える。また、今後の社会情勢や学生の変化に対応し、学生が授業の目的を達成するためにも、学年間での比較から違いを検討するだけでは

なく、学生の特徴やその後の学校生活と関連した調査を行うことでどういった効果や影響が現れるのかを検証していくことが必要である。さらに、授業担当教員のねらいや考えと受講学生の捉え方の差異についても比較することで、授業効果の更なる向上を図ることができるのではないだろうか。

引用文献・ホームページ一覧

- 1) 文部科学省 大学における教育内容等の改革状況について (平成30年度)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm (参照日2023年3月25日)
- 2) 大学初年次教育研究会 (2020) 大学1年生からの社会を見る眼のつくり方. 大月書店
- 3) 福井邦宗・中澤史 (2021) 構成的グループエンカウンターを取り入れたスポーツ総合演習が大学新入生のコミュニケーション・スキルに与える影響. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39: 41-46
- 4) 金沢星稜大学授業シラバス (2022) スポーツ総合演習
- 5) 樋口耕一 (2015) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—. 株式会社ナカニシヤ出版
- 6) 新谷洋介 (2022) 2022年度金沢星稜大学「スポーツ科学概

論 (第10回)」での「スポーツ総合演習」に参加した1年生を対象とした「スポーツ総合演習時にスマホを持たない状況について」調査結果

- 7) 益子行弘・斎藤美穂 (2012) 教師の表情とクラス雰囲気との関連性の検討. 日本感性工学会論文誌, 11(3):483-490
- 8) 三島美砂・宇野宏幸 (2004) 学級雰囲気に及ぼす教師の影響力. 教育心理学研究, 52(4):414-425

参考文献

- ・ 藤田哲也 (2006) 初年次教育の目的と実際. リメディアル教育研究, 1(1): 1-9
- ・ 法政大学授業シラバス (2022) スポーツ総合演習
- ・ 友野隆成 (2020) 加齢に伴う曖昧さ体制と精神的健康の発達の検討. 宮城学院女子大学研究論文集, 130: 33-45